

平成22年11月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

黒沢谷の山地性動植物

黒沢川は富岡の落合橋（標高120m）の下で成木川と合流し、下って入間川となる荒川水系の河川です。源頭部は青梅丘陵ハイキングコースの物見櫓の北側で、稜線部の標高は約400mです。ここから北東へ流れ成木川と合流します。流域の山は丘陵から低山地ですが、標高が低いにもかかわらず意外な山地性の樹木があったり、山地性の昆虫が確認されたりしています。

小曾木三丁目の黒沢川右岸（標高150m）にトチノキの大木があります。目通り2m13cm、樹高約23mの立派な木で、川の上に大きな枝を広げています。春、枝先に大きな円錐花序えんすいかじょ（※註）の特徴ある花を直立させた姿が目立ちます。山地性の木で、高水山の山麓や御岳山の源流部から西の奥多摩山地に見られる木です。このような低標高地にあるのは珍しいです。黒沢三丁目の青梅坂への登り口にも1本のトチノキがあります。上栃谷、下栃谷という地名も残っているので、この辺りには昔はたくさんのトチノキがあったのではと想像されます。

小曾木二丁目の中谷（なかのや）は、大手とも呼ばれ「でいだらぼっち」の伝承が伝わる地です。この谷間の北向き斜面（標高150m）に胸高直径約20cmイヌブナ2本が生えています。うち1本は上部が枯れたので伐られましたが、切株から新しい芽が萌芽しました。無事に育ってくれることを願っています。この木も高水山、御岳山より西の奥多摩山地に分布する種で、低標高地にあるのは珍しいです。

富岡一丁目の長澤入は、モミの大木が残る谷です。標高150～180m付近で、モミに混じってツガが散見されます。ツガは山地の尾根上などに見られる木で、御岳山の山の上などには大木がたくさんありますが、このように標高が低い場所にあるのは珍しいです。

日本列島の歴史の中では、今よりずっと寒い時期があり、黒沢川流域の山も冷温帯の気候に成立するブナ帯の森林であった時代があったはずですが、気候が暖かくなるとともに、ブナ帯の森林は水平分布が北へ移動するか、垂直分布が上がります。現在、多摩川流域でブナ帯の森林が成立しているのは標高700～800m以上です。黒沢谷には、トチノキ、

イヌブナやツガが取り残されても生き続けられる、限られた条件の環境があったのでしょう。

黒沢三丁目の黒沢川支流（標高約 1 4 0 m）ではムカシトンボの幼虫が確認されています。このトンボも奥多摩の山地溪流に生息する種で、これまで知られていた一番東側の生息地は平溝川上流です。ムカシトンボが生息する東京都における最低標高地かつ東限生息地になります。

小曾木二丁目の中谷で1頭だけ採集されているスギタニルリシジミも山地溪谷の蝶です。この種の食樹はトチノキなので、黒沢川沿いにわずかに残るトチノキで発生した可能性もあります。

また、山地性と思われていた昆虫が、近年になり丘陵部で何種も確認されています。カミキリムシ科のコウヤホソハナカミキリ、ルリボシカミキリ、コガネムシ科のオオトラフコガネなどです。これらは山地森林性の種で、短伐期の若齢林だった丘陵から低山地の里山林が、放置され鬱^{うっ}そうとした森林環境に変わったことにより、細々と生き残っていたのが復活したのか、あるいは近年に山地から低標高地に分布を広げてきたと考えられています。

標高が低い黒沢谷に、意外な山地性の樹木があったり昆虫がいたりするのは、黒沢谷の気候的条件の特質や歴史に秘密がありそうです。

（文責 久保田 繁男）

※註

花序は茎や枝についた花の配列、もしくは花をつけた茎や枝自体の事を指します。円錐花序は茎や枝の主軸が複数回分枝し、各分枝部分が総状に花をつけ、全体が円錐のような形になる花序の事です。下図のような形になります。

